



一字 一筆

静岡の今

105

「暑さ寒さも彼岸まで」というが、9月19日は彼岸の入り。今年ほど待ち遠しかったお彼岸はない。

彼岸は春分、秋分を中日とし、前後各3日を合わせた計7日間をいう。この期間に行う仏事を「彼岸会」

「暑さ寒さも彼岸まで」というが、9月19日は彼岸の入り。今年ほど待ち遠しかったお彼岸はない。

言い、宗派を問わず各寺院で特別の法要が行われる。この期間に墓参りに向かって先祖の墓参りに向かう人が多く、お盆（8月中旬）と同様、帰省や里帰りをして先祖の墓参りに向かう人も少なくない。

ところが、新型コロナの感染拡大防止によって、今秋の彼岸会はほとんどの寺院が中止や縮小を余儀なくされている。静岡市内のある

寺院（浄土真宗）では、例年は中日に高名な講師による法話と読経の法要が行なったが、今年は中止となつた。代わりに「密」を避けて、彼岸の間に6回の小規模法要を行う。

参加者に高齢層が多いことも自粛に拍車をかけて

いる。彼岸中の21日は「敬老の日」。例年だと、この日の前後は各地で「敬老会」が花盛りとなるが、今年開催を予定している会場数は、静岡市は前年の299力所から48力所に、浜松市も418力所から79力所にそれぞれ減つたという。

彼岸という言葉は仏教用語に由来し、仏の住む「極樂淨土」を指す。それは西方にあるとされ、春分と秋分は太陽が真東から昇つて真西に沈むので、私たちの住む「此岸」と彼岸が最も近くなる日と考えられた。そこから春分と秋分をそれぞれ中日とする彼岸に墓参りをする日本独自の習慣が生まれたとされる。

今年のお盆は帰省や里帰りを控えた人も多かつた。秋の彼岸も移動の自粛は続きそうだ。コロナ禍は、極樂淨土と俗世の接近にも水を差した。心なしか人影の少ない墓地に彼岸花が咲き始めた。律義に季節を告げる赤い花を秋風がかすかに揺らせた。

（前静岡県監査委員・富永久雄）
写連・樋田進さん撮影